

二一つの山岳美論

近藤等

一七八六年にアルプスの最高峰モン・ブランが征服され、その山麓の町シャモニが世間の脚光を浴びるようになって以来「氷河見物をする」ことが時代の流行のようになってきた。この結果、一九世紀に入ると、多数の詩人や作家が次々とアルプスを訪れるようになった。イギリスのバイロン、シェレー、ドイツのゲーテ、フランスのユゴー、ゴッテ、ラマルティヌ……

かくして、アルプスの美しさは多数の作品のなかに姿を現わすようになり、世間の関心をひきつけたが、一九世紀の後半に入ると、山の単なる印象を語るだけではなく、それを審美的な態度で研究する労作が発表されるようになった。その代表的なものとして、イギリスの美術評論家ラスキンの、主として『近代画家論』のなかに発表されている山岳美論と、フランスの歴史学者ミシュレの著『山』の中に説かれている山岳美論を内容的に考察してみたいと思う。

ジョン・ラスキンの山岳美論

ラスキンが一八四三年から一八六〇年にかけて発表した不朽の名著『近代画家論』は、アルプスの栄光を審美的に探究し、解説した最初の著述である。

一八三二年頃、ジョン・ラスキンは、すでにアルプス連峰についての知識をもっていた。彼は、十三歳だったが、

風景画家、ターナーの挿絵が入った、ロジャースの名著『イタリア』の豪華本をひとから贈り物としてもらっている。ラスキンは、この本によって、のちに彼が『近代画家論』のなかで絶讃してやまなかったターナーの存在と、山岳の存在とを同時に発見し、以後、ターナーと山岳は、彼の終生の龜鑑のようなものになった。このことは、ラスキンの回想記『プレーテリタ』をみるとわかる。

その翌年、彼は両親につれられて、シャモニに行き、彼が両親とともに愛読していたH・B・ド・ソーシュールの『アルプス旅行記』の描写の正確さをたしかめたのだった。

のちになって、ラスキンは、十四歳の頃の自分が、アルプスの山々を眺めてはじめて感じた印象、眼のくらむような熱狂を思い出して、『プレーテリタ』の中で次のように要約している。

「アルプス連峰の美しさは、雪をまとったその優雅な容姿にあった。私は、私自身にとっても、また山岳にとっても、そそり立つ数々の岩壁以上にすばらしい神の玉座がほかにあるとは思えなかったし、また、山々をおおう雲の魂ほど崇高な御霊ホムレが存在し得るとは考えたくもなかった」

以後、ラスキンは、ほとんど毎夏、アルプス連峰を訪れることになった。なぜなら、彼の眼に映じる唯一の眞の山岳は、アルプス連峰だったからである。アルプスに比較すれば、祖国イギリスの北西山岳地帯のウェスト・モリアランドの山々は、彼にとって、単なるもぐら塚の連続にすぎなかった。

一八四二年に、ラスキンは、幼な友だちのクロチルド・ドメックが結婚したことで、心の傷手をいやそうと、アルプス連峰を訪れたのだった。はたして、彼は、シャモニに滞在しているうちに、もう一度生きようとする積極性と元氣とをとり戻した。そして、徐々に溪谷や、アルプスの山々のうちで、あまり嶮岨ではない場所を探険しはじめた。ついで、一八四四年以後、両親のはからいで、彼は、ジョゼフ・マリ・クーテを自分のガイドとすることができた。

クーテは、かつてガイド頭だった男で、ラスキンに山登りの手ほどきをした。

ラスキンがアルプス連峰に対して行なった旅行を、遂一数えあげるまでのことはないが、一八四四年の夏には、二度シャモニを訪れ、ツェルマットを一回訪れている。それから、モンテ・ローザの麓のマクニャーガや、アンツァスカ溪谷などの、ほとんど知られていないイタリアの溪谷を歩きまわった。さらに、美しい修道院で有名なグラント・シャルトルーズ、エンガーディン、クールマイユール、ベルナー・オーバーランドにまで足をのびしたが、その足がかりは、いつもシャモニであった。

一八六三年九月二十三日、ラスキンは、シャモニにかなり広いがあまり値打ちのない地所を買った。その地所というのは、海拔二千メートルの高さにある下ブレチェールの急坂にあった。

一八五九年——それは、ラスキンが、やっと青年らしいピュリタニズムからはなれはじめた時期だが——彼は、ふたたびシャモニの溪谷を訪れ、精神を浄化しようとして企てた。また、一八八一年、憂うつ症にかかる寸前、さらにシャモニを訪れ、もう一度、理性をとり戻し得たように思った。『ブレーテリア』のなかで、彼は次のように書いている。

「いま、回想してみても、すばらしい、賢明な日々をすごしたといえるのは、モン・ブランや、モンテ・ローザや、ユングフラウを眼前に見てすごした日々だけだったと思う」

ラスキンは、各山塊について、独特な知識を獲得していた。彼は、いわゆるアルピニストではなかったが、すばらしい健脚の持ち主で、その時代には、めったにひとが訪れないような、たくさんの峠、氷河、高原を歩きまわった。その上、彼は、画家のような観察眼をもっていた。ターナーの弟子をもつて自認するラスキンは、いままで書かれた山の書物には、比肩するものがないほど、詩的で、しかも、正確な描写力で、多くの作品を書いた。

そして、彼の敘述の方法は、云うならば、現実的理想主義であった。つぎにあげるモン・ブラン山頂に月が昇る描写によって、われわれはかなりはっきり彼のその方法を知ることができる。

「一時間のうちに、暗い影のなから姿を現わした峰々は、海のように明るく、すきとおった空のなかにくっきりとくざられ、峰々の頂きには、毛皮のような雲の縁飾りがついていていた。だが、その雲のひとつひとつも、月光に、かすかおぼろにみえる霧、白い炎さながらの泡となって、霧散していった。月が昇った。その瞬間、ひとつの流星が、ドームの上に落ちてゆく姿がみえた。月は皎々と照り輝き、もうモン・ブランをみることはできなくなっていた。その姿は、月光のなかに消えてしまっていたからだ」(『プレーテリア』第二巻、第五章)

このような敘景には、明白に印象派ターナーの影響がみられる。

ラスキンは、アルプスのありとあらゆる溪谷を知り、それらの谷の地理的な相異、それぞれの地質的な構造、さらに牧歌までも知っていた。

ラスキンは、また、シャモニの近くのペルランでは、それまで子供にだけみえるといわれた黒衣の女の降臨について、詳しい調査をした。(アレン版『書簡集』三十六巻、一八三九年八月二十六日の頃、ならびに、スティルマンの『一新聞記者の自伝』一卷、十七章参照)

その上、ラスキンは、山国の人々に接して彼らについての正確な知識をもっていた。ルソー以来、山国の人々の真の姿は、ふしぎなことに、文学にはあまり伝えられず、ただ、ロマンチックな『善良な人々』という観念でしか書かれてはいなかったのだ。また、ラスキンは、正確な地質学者でもあった。

こうした結果、山岳は、ラスキンの作品のなかで、重要な地位を占めるに至った。

ラスキンが『大陸旅行記』を書きはじめたのは、十一歳のときであり、その大部分は、アルプス連峰譚の詩でも

あった。だが、それらについては、ここではふれないことにする。

十六歳のとき、彼は、モン・ブランのヘメル隊の遭難（一八二〇年、雪崩に吞まれる）について同じようなジャンルの詩を書いていた。以後、十年のあいだに、ラスキンは、『シャモニ散歩』をはじめ、詩三篇を発表したが、それらはいずれも、アルプス連峰を讃美するもので、後年のラスキンを彷彿させている。

それから二年たつてラスキンは『一八四五年を思い出して』の『マレンゴから見たアルプス連峰』のなかで、アルプスを「神のピラミッド群」とよび、また『氷河』のなかでは「山々には、何物も侵しがたい平安がある」と書いている。

ラスキンは、その当時、一八三〇年以来、英国全体をおおっていたヴィクトリア朝のオーソドックスな伝統にひたっていたのだが、大部分の旅行者がアルプス連峰について語るときは遺憾の念の代りに、アルプス連峰が、神から荷担された大きな役割を発表したのだった。彼は、いく度となく、山岳の神聖な使命を強調し、その使命を、有名な格言『山岳こそ、地上の寺院である』という言葉のなかに要約した。山岳は、神の御手にかかって造られしもの、それも、神が、一番完全に造り給うたものであるというのである。

「山々は、創生以来、三日目に造り給いしものなり」と、創生記にも書かれている。ラスキンは、神の御意志が、山々を原始の埃よりはなし給い、それを彫み給うたことに関するいくつかの短詩を作った。それには、山々がもつとも神秘的な外貌をしていること、また、山々が峨々とした威容で統べている風景の中心で、「大地の骨格」であることなどが書かれてある。

また、ラスキンは、長いあいだかかって、山々の役割について、地質学的な研究を企てた。彼は、アルプス連峰に對して、非常にたくさんの知識を抱いていたので、調査をおしすすめることができたのである。

レマン湖畔一帯、シャモニの峰々、マッターホルンも、ラスキンにとって、同じく論議の対象となっている。山々の背の織りなすカーヴ、山稜の形、あるいは岩壁の線や、雪や奔流で侵蝕を受けた尖峰などが研究されている。

「マッターホルンの側面は、サーベルでえぐられたようにそそり立つ」と、彼は『ヴェニス石』(Stone of Venice)の一卷、五章のなかで書いている。また、彼は、ブレヴァン、エギーユ・デュ・モアヌなどについて、その地質構造を図解を附して説明している。

だが、ラスキンの思想は、ここから、独特な方向に発展する。つまり、『近代画家論』四巻、十六章、三のなかで、マッターホルンについてなされた長い研究の最後の章句は、次のような言葉で終っている。

「風景全体が……人間の繁栄のみならず、神々の御繁栄すらほろんでしまっているひとつの世界のように思われる。あるいは、御自分たちの墓になさろうと、この山々をお造りになった最後の大天使たちも、各自、柩のなかにおさまって、この永遠の休息の光の下に横たわっていられるかのようだ」

要するに、ラスキンにとって、アルプスは神が単に大陸の地質学の一部として造り給うたものではなく、アルプス連峰そのものが、精神的な力をもっており、ある意味では、連峰は風景の聖書ともみなし得るのである。

ラスキンは、ヴァレ地方や、高フォシニーや、ロンバルディアの渓谷地帯には非常に明るかったので、これらの地方の住民の生活苦、とくに僻遠の小村に住む山国の人々の苦しみを、もとより知らないわけではなかった。その点、彼は、スイスの山村を、この世の楽園とみなすような、ルソーの牧歌的楽天主義とは、およそ不縁な存在だった。

アルプスの村々の不潔さ、村民たちの怠惰迷蒙な迷信、このようなものが、渓谷を地獄みたいなものにかえてしまっている。ラスキンは、とくに、その点をヴァロシーヌとトリアンを例にとって語っている。

だが、彼は、彼自身、『近代画家論』四巻、十九章で、『山の憂うつ』(Mountain gloom)とよんでいるこのなげか

わしい状景を眼の前にして、なんとかこのような状態を改善しようとして、聖書のなかの一句、『山々は、ひとのために平安を生み出し、岡は正義を創ることを』という祈禱文で結んでいる。

ラスキンの全作品には、山岳をたたえるすばらしい讃歌がひびいている。彼は、『プレーテリア』二巻、五章のなかにこう書いている。

「天は、なにがゆえに、らくだにこぶを与え給うたように、アルプス連峰をつくり給うたのか。また、りんどうに青い花を、人間には、山を愛する心を与え給うたのか」と。

だが、他方、ラスキンは、このような山岳への讃歌を、科学的な方法によって証明しようと思ったが、実際には、啓蒙的な筆致で書いたのだった。山岳は、われわれに、美しくすばらしい教えを説いてくれる。だが、所詮この美しくすばらしい教えは、全智全能の神御自身の教訓にはかならない。アルプス連峰は、建築学的にみても、ほぼ完璧な亀範のひとつといえる。山々の織りなすカーヴ、割れ目、氷河、奔流、高山植物の花の色彩は、激しいと同時に、やさしい調和をおびている。山岳の景色の荒々しいところ、岩と岩とのあいだの迷路、峻嶒な岩壁は、ふしぎな、同時にすばらしい魅力で人を誘う、と彼は書いている。

堆石でできた湖や、岩から岩へと奔流する小さな流れの数々や、氷河、そうしたものを、ラスキンはすばらしい描写力で描いている。

ランデック近傍の、青りんどうが帯のように広がっているありさまを、彼は、次のように宗教的な筆致で描写している。

「その帯は、天空の地上に対する反射なのだ。アルプス連峰には、ひとつの使命、つまり、いかなる人間の心をも高めてくれる神の御業の美しさへの渴仰をいやらしくするという使命があるのだ」と『近代画家論』五巻、十章

参照)

深山のなかにある渓谷は、ラスキンにとって、神の存在が感じられる、しじまの聖堂なのだ。渓谷の嬌慢で、清浄な高潔さは、人間を教育する役目をはたしてくる。渓谷の高潔さは、宗教的熱狂をまもり、信仰心をも純化させてくれる。昔から、アルプス連峰は、すぐれた精神上の教師であった。このことは、著名な『ジグザグ折旅行記』を書いたテップファーや、ソーシュールなどの多くの著作者たちがふれていることで、ラスキンの議論にたくに獨創性はない。

彼は、十一世紀に、聖ブルーノが建てた有名な修道院のあるグラント・シャルトルーズとカルヴァンの生れたジュネーヴの位置について、歴史的なすぐれた考証をしている。すなわち、アルプスに囲まれているという環境が、この二つの土地に、なんらかの宗教的な偉大な役割をはたしたのかもしれないというのだ。

また、ラスキンは、プレ・ラファイエル派の建築論『ヴェニス石』(Stone of Venice)のなかで、たいはいに陥った文明のイメージである『ヴェニスの廃跡』に対して、山岳の岬々とした清浄な美を思わせる『シャモニ石』を対置せしめている。『シャモニ石』という標題の本は、とくに発行されはしなかったが、それに相当するといえる内容は、『近代画家論』第四巻を埋めつくしている。そして、この巻は、明らかにこの思想を描くのに適した筆致で、宗教的であり、予言者めいている。

だが、山岳として永遠ではない。山岳もまた衰退し、たえまなく崩壊する。永遠に生き給うのは神のみである。それで、地上の聖堂である山岳の崩壊によって、永生の神への認識が予知される。

山岳は、ただ、審美的で瞑想的なものとい切ってしまうてはいけない。美というものは、元来、ある程度の実際の効用性と不可離なものだ。なぜなら、世界とは『智、至高の善意』で秩序を与えられたものだからである(『近代

画家論』第四卷、十一章)

山々は、なるほど、渓谷に脅威を与える。しかし、一方、それ以上に渓谷を保護し、人間や動物の生命を守ってくれるのだ。シャモニにおいて、海拔二千メートルのところに君臨する岩棚は、雪崩をふせぎ止め、森を守ってくれている。また、北チネーリッヒに近いゴルドーは、ラスキンにとって、ロッスベルグ峰のおそろしい地すべりではなく、ターナーの美しいカンバスを思い起させてくれるものだった。

また、山国の地理的条件に合うように、ベルン、ウリの諸州では、木造の魅力的な山小屋が建てられるようになった。昔から、山岳は芸術を浄化し、山岳地方のえもいわれぬ万象の形や色彩、現実に咲きながら、どうしてもお伽の国のことしか思えない植物群などによって、それらの芸術は暗示を受けてきた。

ラスキンが、山岳に対して神秘的な崇拜の念を抱くようになったのは、以上の理由からであった。

彼は、『近代画家論』四卷、二十章で、次のように書いている。

「山岳がつくられたのは、まるで人類のためを思つてのようだ。山岳は、人類のための学校であり、また寺院でもある。つまり、山は、僧侶のための極彩色の書物の宝庫であり、画家にとつては、多くのありのままの教材にあふれ、思想家には、うす暗い修道院そのままに静まりかえったところであり、信者にとつては、栄光満ちあふれた場所なのである」

だが、ラスキンが、アルプス連峰に輝かしい尊敬を抱いたのは、渓谷が、昔ながらに「静まりかえつたうす暗い修道院」であった時代に限られていた。そして、すでに渓谷には、ホテルが林立するようになり、毎年、その数は増していった。

一八六〇年、彼は、シャモニとスイスが、建物のために、ひどく破損されたことをなげいている。(アレン版『一

八六〇年、J・ブラウン博士への書簡」

また、山にやってきて、山頂を汚すような人々、すなわち、俗悪なツォーリストからアルピニストたちに対してまで憎悪の念を抱くようになった。

ラスキンは、山登りのスポーツとしての面を知らなかったし、また一緒に出かける友人もいなかった。彼が散策するのは、いつも非常に限られた専門的な目的、氷河の研究、もしくは岩の研究のためだった。

アルピニズムは、ラスキンにとって、所詮異教の教えのようなものにすぎなかった。彼は、『プレーテリア』のなかで、「ツォーリストたちの数がたえず増大しつつあるので、シャモニ上方の地所を売った」とみとめている。つまり、彼は、ホテルがふえると、山村はほろびてしまうことを予知したのだった。

まだ、ウィンパーがエギーユ・ヴェルトを初登攀したニュースを聞くと、思わず、次のような悲嘆の叫びをあげ放った。

「あなたがたは、地上の聖堂を、競技場に変えてしまった……そして、アルプス連峰を熊の曲芸の際に使う、てっぺんに餌のついた棒のように思いこみ、それによじ登り、やがては、喜びの叫びとともにそこから下りてくるのだ……かつて、あなたがたの詩人たちは、その同じ峰々を、あんなに熱烈な畏怖の念もてあこがれたものだったのに(『胡麻と百合』一章)

ラスキンは、矛盾や自己撞着の多い人だったが、この点だけは決して妥協しなかった。

彼は、シンプロン峠で、著名な地理学者であり、アルピニストの先駆者の一人ともいえるJ・D・フォーブスと知り合い、親友となった。

フォーブスは、氷河の運行についての己が理論にラスキンを改宗させようとしたのだが、ラスキンは、持ち前の激

しい気性と發揮して、学問的な論争に飛びこんだのだった。

ラスキンの作品は、山岳を純粋に審美的な面からあつかつたものとしては、かつて類例をみなかつたほど、完璧な論稿といえる。そして、それまで書かれたどの論文よりも、はるかに明快で理路整然とした山岳の哲学が確立されている。

彼の山岳への崇拜は決して盲目的なものではなかった、彼が述べようとした山岳観は、非常に詩的で、神秘主義的な傾向が深いにしても、その根底には、崇拜する山岳の景観に対する深遠なるうちくがあったようである。

ジュール・ミシュレの『山』について

歴史学者のジュール・ミシュレ（一七九八—一八一四）は、有名な『大革命史』の著者であるが、高山に関心を持ち、それを文学的な分野にもちこみ、科学的あるいは精神的に山の真の姿をつかもうとくわだてた人である。一八六七年の作になる『山』(La montagne)は山頂の光榮について、散文で書かれた頌歌というべき性質のものである。だが、山をよく知らないミシュレにとっては、いささかこの意図は荷が重すぎたということが結論的にも云えそうである。

ミシュレは、これよりだいぶ前に、その著『フランス展望』(Tableau de la France)のなかで、ピレネー連峰について書いている。だがそのとき、彼は実際のピレネーを知らず、ラモンの著書から引用したものであった。ラモンの心酔者である歴史家ミシュレにとって、ピレネーの連峰は、過去の歴史の戦場として映った。むかし、シャルマーニュ大帝の時代、フランス軍は、回教徒のモールの軍勢をピレネーの彼方に追い払ったものだ。しかし、その勝利は、大帝の軍のしんがりとなって、はなははしく討ち死にした勇敢な騎士、ローランの犠牲をともなったのである。ミシュレは、『シャノン・ド・ローラン』に思いをはせつつ、歌っている。

ローランは死せり

されど、フランスは勝てり

しかし、ミシュレは「ピレネー連峰を襲ったのはモールの軍勢だけではない、モールよりはるかにおそろしい敵が、過去も、いまも、ピレネー連峰をおびやかそうとしている」と書いてある。その敵とは、時の流れのもたらす荒廃なのだ。

「そびえたつ、先のとがった山々の頂きはもはや老朽している。だが、山々は、度かさなる嵐にもめげずたかかう」そして、ミシュレによれば、これら山々の頂上が勇敢に嵐に対して抵抗してくれるからこそ、溪谷の生活が安穩でいられるという。

だが、このような考え方は、ミシュレが創造したものではなく、先にのべたラモンの思想をすっかり継承したものだ。一八六五年ごろ、ミシュレは、『鳥』『昆虫』『海』等の作品を発表したあと、『山』を書くかと思いつた。そのために、かなりな数の山についての記録を蒐集したことは考えられる。だが、『山』を読んでみると、ミシュレは他人の作品によって山岳観を変えた様子はなく、若いとき『フランス展望』を書いたときと同じような山に対する観念をもちつづけていたことがわかる。

『山』は、なるほど若き日の作品とくらべれば、はるかに多彩で、ヴァリエーションに富んでいる。

彼は、この書を書くために、実際、アルプス連峰を駆け歩いたのであるから……

しかし、彼は、同じくアルプスの旅行記を書いたラスキンとくらべると、山岳に対する正確で多様な知識においてはるかに劣っていた。高[↑]フォシーニ（スイスとの国境にある現在の高[↑]サヴォア地方）を訪れたとき、彼はサン・セルヴェの近くの一つの谷に足をとめているが、ここからはピオナセイ氷河の一部しか見ることはできない。

彼にとつては、山々の頂上はその象徴を現わすものであり、モン・ブランを「偉大なる隠者」、ピレネー連峰を「火の神の老嬢たち」、ユングフラウを「冷酷な巨人」とよんでいる。

ミシュレは、このようにあまりに性急で大胆すぎる先入観を基礎として『山』の論議をすすめている。また、表現も、往々にして正確さを欠いている。彼は、ナチュラリストとして自認していたが、実際は決して真の自然を描いてはいない。

そのうえ、彼が参考として使った書物は決して十分だとはいえなかった。しかも、それらを引用する場合も、しばしば見当はずれなやり方をしている。通俗的な本を、行きあたりばつたり参考にし、それで満足していたふしがないでもない。ファン・デア・エルストは、『ナチュラリストとしてのミシュレ』という論稿のなかで、ミシュレの『山』には、非常に大きな科学的な誤診があると指摘している。ミシュレは、実際、アルプス地方を旅行して、科学的に山を研究した三人の水河学者、アガッシ、デソール、チンダル等の本をほとんど読んでいなかったらしい。

しかし一方、そのような科学的なアルプス研究よりも、ミシュレの『山』は、山岳の精神的な面を強調した本であるともいえる。ミシュレは、単に山を客観的に描こうとしているのではなく、それらを人生になぞらえ、一種の福音書のようなものを書くつもりであったのだ。山は、彼にとつて、人生そのものであり、あるいは神域、象徴ですらあった。そして、ミシュレの『山』の骨子をなすものは、神秘的、もしくは観念的なひとつの思想大系なのである。

人の心身を鼓舞してくれる稀薄できびしい高山の空気、樹の枝をゆさぶる、草花に吹きつける激しい風——このような苛酷なまでの山の自然は、常に己が敵に対して容赦なき葛藤をつづけている人生そのものと同じだといえる。

これらのことから、ミシュレが山に対していただいていた本当の考えがわかってくるような気がする。

もっとも、彼にとつて、山岳とは、高原の森や牧草地帯だけを指すので、彼が描いているのは、峨々たる山頂や、

氷河ではなくて、せいぜい高山松やりんどうが生えているあたりなのだ。氷河は彼にとって、「死を連想させるイメージ」だったり、「長い葬列」だったり、「永遠に生につきまとおうとする死」にすぎなかった。

モン・ブランは、蒼白な、荒涼とした月から落下した岩のかけらにすぎないと彼は思った。ミシュレの好んだ山は、サン・ゴタールやモン・スニのような山だった。

彼の山岳観は、「ほほえましい溪谷」と、「おそるべき頂上」を対置させるという、十八世紀以来の、ルソー風の考えにもとづいている。したがって、オーバーランドの溪谷の方に、山々の頂きよりも魅力を感じるといったラスキンにくらべると、ミシュレの考えはさらに時代遅れで、はるかに古風だといえよう。

ラスキンの『モダン・ペインターズ』は、矛盾の多い書物だが、その点、ミシュレも負けてはいない。

前にのべた通り、ミシュレは万年雪におおわれた高山の頂きの模様を書くことを拒んだが、また別の箇所では、その鉄則に反し、アルプス全体の風景を描いてみようとし、アルプス連峰を、「心をなぐさめてくれる山々」と書いている。

しかしながら、結局、ミシュレのこの書物は、明らかに山岳を、美と恐怖という二つの反定律において眺めようとする古風な論理にもとづいている。そして、そういう論理は、ともすれば、単なる象徴、あるいはまちがった結論につらなりがちだ。ミシュレにとって、一番美しい頂きは、針峰群や、氷河のみられない、あまり高くない山塊を意味している。

「アルプスの美しい溪谷、ヴォージュ山系の丸い谷こそ、創造主の御姿を一番美しくあらわしたものである」
それにしても、『山』の冒頭には、すばらしい敘景描写がみられる。

「アルプスに比すべきものはなにもない。巧みに配列され、連続した山々の集まりの暗れやかさによっても、氷河

の奔流に、湖に、大河にと全ヨーロッパに生命をそそぐ貯水池の壮大な配置によっても、他のいかなる山も、アルプスに似寄っているとは思われない。

アルプスにあつては、すべてが和合している。ポー、オヌ、ライン、ダニューブを四つの海へ送りこむ、高雅な山の斜面は、いわば一望のもとに収め得ないという風には分離されてはいない。大部分の河は、生れでるときふれ合はんばかりであつて、その兄弟なる河は、系統の中心、ヨーロッパ世界の中心なる同一の山塊から発している。

これらの山々によつて受ける至高の印象は、いささかも幻想的なものではない。それは真の偉大さの、自然にして正しき直感である。山はヨーロッパの貯水池であり、豊饒な宝である。

山は気流、風、蒸気、雲などの高き反応の劇場である。水は、はじまれる生命である。生命の循環は、軽快で、透明な形式のもとに、山上で完成する。山々は媒介であり、散在するか、あるいは対立する要素の仲裁人である。

山々は、それらの要素の調和であり、憩いである。山々は、それらを氷河のなかに蓄し、公正に諸国へと寄贈するのである。

美しい和合、高雅な調和、他所にあつてはほのぐらきすべてのものも、ここでは麗朗のなかに漂う。アルプスの山々は光である。

この本はアルプスについてのみ書かれたのではなく、ピレネー、アペニン、ジャワの火山などにも筆が染められているが、最も美しいのは、いうまでもなくアルプスに関したところである。

ついで、ミシュレは、アルプスの氷河の流れ、河の形成について観察をし「アルプスの奔流は、いずれもなんとすばらしい形をしているのだから」と書いている。

そして、美しさ、やさしさの二点で、これらの奔流と比肩し得るものがあるとするなら、それは、スイスのいくつ

かのすばらしい湖のほかにはないとする。

「スイスには千の湖があるといわれる。世界の他のいずれの国も、かくまで美しく比類なき鏡は持っていない。スイスを見た後では、どんな国も薄暗く、私をしていわしめるなら、盲目とすら思われる。湖は、スイスの眼であり、空の紺青をうけて、その色彩は倍加する」

この最後の一節は、ゴーチエの詩エスパナ、『山の碧い眼』を思いだして書いたものかもしれない。このように美しく静かな湖面の水は、氷河から落ちる奔流の褐色の波濤とのみ比肩し得る。

これらのやさしい湖があつてこそ、サヴォアの人々もすばらしいものにみえ、ライン河やローヌ河の激流も静かな流れとなる。

静かなジュネーヴと、荒廃したサヴォアというルソー以来の自然の葛藤も、レマン湖のほとりではしずまるのだ。

「この湖は、心をも自然への崇拜の念でみだす。誰もかれもが、しらすしらすのうちに、すばらしい人間愛によって理解し合えるところだ」

ミシュレ以前にも、国際連合の予言者はいた。そして、ミシュレ自身も、その予言者の一人だったのだ。

レマン湖にそそぐ河の流れは、次のような精神主義と発展せしめた。

「あの河の流れ、さらに、おそらくあの流れの源であろうあの美しい紺碧のアーチをみると、人は尊敬の念を禁じ得ない。河の奔走するさま、雄々しく大きな滝のように、大きな湖の神秘のなかにおごそかに流れ落ちるさまは、感嘆なくしては眺められない」

しかし、ここには、ミシュレにしばしば認められる矛盾のひとつがある。彼は、凍ったアーチをおしみなく讃嘆する。だが、そのアーチこそ、彼が心底きらっていたあの氷河にその源をもつものではなかったか。

実際、ミシュレの奔流、湖、河に関する描写は、すでに十八世紀作家がよく使った抒情的マンネリズムのくりかえしにすぎなかった。

ミシュレは、レマン湖を祝福している、だが、それは、一七〇二年、イギリスの文人、アディスンが、シャブレからレマン湖を眺め、その明るい水面を、モン・ブランの暗い不動の姿と対照せしめた筆法のくりかえしだった。

モン・スニヤピレネー連峰の讚美も同じ模倣だった。したがって、ミシュレの『山』は、非常に雄弁な敘景文にもかかわらず、十八世紀的な觀察からは一歩も前進してはいない。

しかし、『山』の一部分には、たしかにオリジナリティがある。山の激しい脅迫にさらされながら、斜面をのぼり、岩蔭に咲くすばらしい植物の世界こそ、ミシュレにとって、アルプス連峰の深い生命の権化と映ずるのだった。

山裾では、栗の木やぶなの木が山の嵐に挑戦する。それよりちょっと登ったところでは、頑丈な松が、その仕事をひきうけている。

「生きとし生けるものを守ってくれる松は、山の呪われた部分からの攻撃にたえている」

さらに、松の木も育たない高い緯度のところでは、落葉松と高山松が、雄々しくもたたかってくれる。『山』のこの部分の讚歌を、ミシュレは次のような華麗な詩的な筆致で歌いあげている。

「裸身の高山松は、己が強壯な根によって岩をふまえながら、すぐれた闘士さながらにおそろしい大雪崩を待ちかまえ、勝ちほこる両腕をさしのべる。彼のみが、この死の統べる世界において、反抗し、永遠の生を示している……。この聖なるところで人間が生きられるのは、高山松の守護があつてこそなのだ。万一、高山松が枯れたら、万事滅亡に向い、死んでしまうだろう。高山松の最後の一枝が折れたら、人間も、もう生棲はし得ないだろう」

こんなふうに、ミシュレは、高山松の樹に、深く、もの悲しく、しかも善意に富んだ魂を見出している。高山松こ

そ、彼にとって、どんな暴圧によっても屈しない英雄に比すべきものであったのだ。

また、花々も樹々を助けながら、死の闘入をふせぎ、人間を救ってくれている。アルプス連峰、特にエンガディンは、色とりどりの花の咲き競う天国のようなところとされている。まばらに立っている栗の木の下には、えに似た、アネモネが、陽の光を浴びながら、自由奔放に、だが、どこか孤影をしのばせながら花を開かせている。

そして、ミシュレによれば、この花々は勇気があつて心のやさしいばかりでなく、「愛する」ということを知っているという。そして、また彼は、大いなる生命の象徴ともいふべきこれらの花々が、お互いに助け合うことをくわしく、叙述している。花の愛の掟こそ、山岳のもつ高邁で清純な特徴の一要素であると述べている。ミシュレは、山岳の大いなる善意を信じている。自然は、彼にとって、人間を見守り、かばってくれる細心でやさしい母親のようなものなのだ。

彼は書いている。

「寛大な心もてる、大いなる高原の自然は、それを愛するひとびとに欣快として己が姿をみせてくれる」

高原の自然全体が、無限の愛につつまれているとミシュレは考える。だから、云うならば彼は一種の汎神論的唯物主義者である。

自然は、とりもなおさず、理想だといえる。

人間は、理想である自然に向つて、手をさしのべなければならぬ。すると、生と愛の交流が、山岳をつつむように、人間をもつつんでくれ、人間と山岳を結びつけてくれるという論旨だ。

このような判断が、一八六七年に書かれたということに首をかしげるひともいよう。なぜなら、その二年前の一八六五年には、ウィンパー一行のマッターホルンでの遭難事故があり、一八六六年には、モン・ブランの悲劇が二回生

じ、五人の人間が遭難死しているからだ。

一体、善意に富んだ山岳が、人間の生命を奪うだろうか？　だが、その疑問を解く前にミシュレの山岳観を觀察する必要がある。

彼は、実在する氷河や針峰群にはまったく関心がなかった。なるほど、彼はマッターホルンの遭難のことをちょっとふれてはいるが、およそ興味のうすい態度である。彼には登山の経験がなかったし、登山なぞは軽蔑して口にだして云いさえしなかった。また、職業的な登山家のみならず、単に山々のあいだを逍遙する旅行者に対してさえも非難の言葉を浴びせている。

「世俗が、これら高潔な高原をつまらぬところにする」

こんな云い方は、ラスキンとよく似ている。

要するに、彼の『山』の目的はC・E・エンゲルも云うように、「アルプス連峰の神託をけがれた人々に伝えねばならぬ」という点にあったのである。

アルプス連峰は、彼にとって、自然という神を祭る祭壇であった。

『スイス書簡集』を書いたローラン夫人や、ラモンのような人々がすでに山岳を語ることで、民主主義や共同責任の観念を人々に教えてくれたものだ。つまり、花や樹は、互いに助け合いながら、山の脅威から人間を守ろうと闘って来ているという思想である。それと同様、スイス独立の伝統的な国是である「友愛」の精神、十二世紀ドイツ王フレデリック・バルバロッサの暴虐に反対して結ばれたロンバルディア同盟、そんなものも、数多くの湖から生じたという。

ミシュレも云っている。

「それらの教訓を守り、アルプス連峰の神託に耳を傾けよう。」

彼にとって、アルプス連峰こそ、仁慈、寛容、廉直などのあらゆる美德を教えてくれるものなのだ。

エンガディンは、うつし世の黄金時代、共和制の天国であるとされた。サン・ベルナル峠は、平和の祭壇であり、アルプス連峰は、人間を再醒させる泉となったのだ、と彼は書いてある。

ミシュレは、また山には、人間にとって最も大切な教訓である、力と高潔さがあることを力説している。ミシュレの山岳に関する神託は、彼の書物の第二部に書かれている次の言葉に要約され得よう。

「山の氷河を下ってくるとき、ある者は山のきびしい精神を獲得した。また、ある者は、崇高な山の頂きを見て、壮烈な飛躍を身のうちに覚える。つまり、誰でも、そこに行かない前よりは、はるかに立派な人間となつてくつてくるのだ」

ミシュレは、このようなアルプス讚美の見地から、過去に書かれた多くのアルプスに関する書物を酷評している。たとえば、セナンクルの『オーベルマン』に書かれたアルプスは陰うつで絶望的すぎるとし、バイロンの『マンフレッド』は難しい誇張がめだつ。さらに、写実的なテップファーの旅行記には、不敬な諷刺が多すぎる、いや、ルソーの『新エロイズ』すら、大げさな美辞麗句が多すぎるといふ理由で、ミシュレの気には入らなかつた。では、そういうミシュレの『山』はどうであらうか？

なるほど、すばらしい敘述の数ページはある。しかしながら、全体としてみれば、退屈きわまる論議のくりかえしで、まとまりがない。

そして、その責任は、ミシュレ自身にある。つまり、彼のあまりにも単純な哲学、山岳を道徳的に説明しようとしたこと、そして、そのころやっと盛んになってきていた、アルプスの眞の姿を科学的に研究する傾向に対する徹底的

な無関心さに帰されるべきであろう。

『山』が書かれたのは一八六七年である。つまり、すでに十九世紀の中葉を過ぎていたのにもかかわらず、ミシュレが抱いていた山岳観は、時代遅れもなほだしい十八世紀の山岳観なのだった。前述した樹や花に関する若干の新説がなかったら、この書の内容は、ローラン夫人時代の山岳観そのままだと酷評されたかもしれない。

もっとも、この書には、神秘的な敘述と同時に、写実主義的な筆致が伺えないこともない。そして、それが新しい試みというならばいえないこともなからう。

しかし、ミシュレが一部の山岳描写をけなすときに用いた論調は、非常にラスキンのやり方に似ている。そして、その点にだけ、彼と、『近代画家論』の作者との類似点があるようだ。

ミシュレは、山塊についての深い知識もなく、実際の山男がどういうものであるかも、まったく知らなかった。

彼はまた、「善意に富めるスイス人」について書いているが、それはルノーの描いたスイス人と同じく、空想によって作りあげたものである。風景についても、ミシュレは、サン・セルヴェ、グリンデルヴァルト、ザマンデン等の山々には、眼をとめようとしなかった。

山の頂きは、彼の眼には、厚いヴェールでへだてられていた。したがって、むしろ彼は山の頂きのことなどは書いていない。そして、それはおどろくべきことだ。なぜなら、英国においては、彼よりはるかに才能の劣る人々が高山の情景を分析、描写することに成功しているからだ。

要するに、ミシュレは、山岳を自分自身のために創造したという点で、ラマルティーンヌそっくりである。彼の描いた山岳は、アルプス連峰でも、ピレネーの峰でもない、まったく別のもの、つまり、ミシュレ自身の山なのである。

彼は、実在する山から色彩豊かで美しい描写を描きとっただけで、自分の気に入らないところは、すべてオミット

した。そして、樹や、草花に彼自身の魂と同じような魂を賦与してみせたのである。

ミシュレの『山』は、ローマン的に山を描いた最後の作品のようである。したがって、この書には、他のローマン派の人々が山岳描写をしたときと同じく、山の風景ではなく、むしろ人間の魂が描かれているのである。